

気仙沼への

第8号
2011.7

東京都台東区東上野6-1-1 (社) 漁業信用基金中央会内 地域活性化研究会
TEL: 03-3841-4035 E-mail: kesenumabureau@yahoo.co.jp

私たちが闘っています

日出 英輔

私たちが闘っています。

気仙沼出身者として、テレビでふるさとの惨状を見ると思わず力が入りますし、元気な旧友の顔を見ると、「やってるな。オラほもやんなくちゃ」となります。

私は幸いにも10年前から水産の保証関係の仕事をしていますので、今は、「ふるさとへのご恩返しのとこだ」と念じながら走り回っています。復興のための金融の本格的な出番が間もなく。結構忙しい毎日を送っています。

それに過般は、農林水産省のOBで義援金

を募集しよう思い立ち、被災地出身の大先輩にも呼びかけ人になって頂き、うんうん言いながら郵便物を発送したり、電話をかけた。また、目黒のサンマの実行委員会で義援金募集をすると思ったので、家人と孫(小2)とでボランティアとして参加。結構この孫が大きな声で「ご協力お願いしま〜す。」と叫び、大口?義援金を獲得。もっとも義援金箱を持って帰りたと言われて閉口しましたが。

気仙沼出身者は、皆、それぞれのやり方でふるさと復興のために闘っています!

力をあわせて復興の早からんことを

藤村 和男

3月11日の東日本大震災は、想像を絶する被害を東日本各地にもたらした。地震発生時に私は港区の芝公園近くで、マイ・カーを運転しており、赤信号で停車中であった。グラグラときたが、これは大地震だ、早く自宅に帰らなければと思い、すぐに首都高の芝公園から高速道路に乗り、横浜市都筑区の自宅に帰った。この後すぐに高速道路は、通行止めになっているが、東名の川崎インターで降りるまで、走りぬけられ

たのは幸いであった。お陰で帰宅難民にならないですんだのである。それからは、深夜までテレビにかじりつき、地震の後の津波の被害の様子を知ることができた。すさまじい勢いで押し寄せる津波や、気仙沼の火事の様子も映し出された。

気仙沼市の上鹿折には、小学校4年のときに日立市から疎開をし、それから気仙沼高校卒業後1年間浪人をして大学に入学するまでの間、住

んでいた。いまそこには、弟たちが住んでいる。鹿折駅の近くで経営していた小さなレストランは、津波と火事で壊滅した。

小さいときから「大地震が来たら、高台へ逃げろ。」と言い伝えをきいて育った。鹿折中学校から、上鹿折へ歩いて帰る途中に、昭和8年の三陸大津波の到達地点に記念碑が建っている。「大津波、忘れたころにやってくる」という趣旨のことが記されていたように思う。また、「稲む

らの火」は、小学国語読本巻10などに掲載されている作品であるが、有名な作品なので、小学校時代に読んだ記憶がある。この作品は、庄屋の主人が、地震後津波が襲ってくると予感し、収穫した大切な稲むらに火を放ち、多くの村人を救った感動の物語である。今回の東日本大震災では、これらの教訓が、生きていたのではないだろうか。これからの、力をあわせての復興の早からんことを祈る次第である。

安寧な日をめざして

花柳 寿々菊

あの魔の日3月11日、大震災の大津波が一気に家の1階から2階へ逃げてそして屋根裏からやっと外に。海水の中何かにつかまって、しこたま油まじりの海水を飲んで、雪と冷たさに気が遠くなり、気がついたら近くの船が火事で、そのため海水が温かくなってそのまま20時間以上つかまったままで助かりました。助かってからも1週間ゲゲーと油を吐き続け死ぬほど苦しかったという人。

天井まで水が来て、やっと屋根の上にその屋根が沈みかけ、又よその屋根に飛びのって、それが又ひっくり返り、そばにいた船に飛びのった。それが又火事、又べつの板につかまって助かった義経の八艘飛びだったと話す人。

助かった後は寒さと飢え、大人三人に白い小さなおにぎりが一つしかなく、のみ水のない三日間だったと、そしてやっと避難所に入ったのに腰の骨を折って病院を転々とする人。

今もまだ続く避難所でなく、親戚の家に家族7人で世話になっているが、皆が精神的に限度

に来ている、家でないので辛いて泣く若い人。又行方不明の身内を探しに今も遺体安置所から帰って来ると、うつになっていると語る人。

まだまだ沢山、話はあり。

一人一人の話がドラマ以上でした。私は仙台にいて被災して4日目に気仙沼に入り、母やお弟子さんや知人の安否を尋ね歩き、心が痛くなり、無力な自分に落ち込む毎日でした。しかし、私はやはりやり続けてきた道を歩くすべしがなく、気仙沼で今月から「特別教室を致します」とお誘いしましたら、子供さんも三歳から中学生まで、そして大人の方も沢山来て下さって、こちらで用意させて頂いた浴衣を着て、一所けんめい体を動かし踊って汗を流して、にこにこして心から楽しんで帰って下さいました。

「良かった、ありがとう」という言葉に私の方が大きな力と有り難さを頂きました。身体が踊ることは心が踊ること、気仙沼に一人でも多く踊る仲間がもどり平穏安寧な日々が来ることを心から祈りやり続けようと心にちかう毎日です。

ふるさと

貝塚 文一郎

陣山や安波山から見る亀山と気仙沼湾の風景が、私にとっては日本一の眺めだと思っています。そして手前に見えるお神明さんの浮御堂や海岸通りの街並みも大好きでした。

幼いころ魚町に住んでいた私は、盛漁期には旧魚市場から聞こえる、そこで働く人々のざわめきや威勢の良いセリの声で目をさまし、昼ともなれば入港してくる漁船から流れる軍艦マーチになんとなく心をうきうきさせられたものでした。

忘れてならないもののひとつに気仙沼弁の存在があります。標準語ではけっして言い表せない温かいニュアンスがあり、帰省したときに聞く祖母や母の気仙沼弁には女性のつつしみや優しさが感じられ、心いやされる思いをいたしました。

いまも気仙沼には、弟夫婦とその家族、家内の父が長く牧師をしていた「気仙沼バプテスト教会」の関係の方々、親戚、友人、知人、また共に古希を祝った同級生の仲間たちがいます。その人たちがこんどの大震災で被災し、たいへんな苦しみのなかにいると思うとほんとうに胸が締めつけられる思いがします。懐かしい故郷の町ががれきの山と化し、悪臭をはなっているなどとテレビで報道されるたびに悲しみが増してきます。

しかし、私は愛する気仙沼の皆さんが、東北

人らしいねばりと知恵で、この苦境をのりこえて復興をはたし、「ふるさと気仙沼」をまえよりも一段と活気のある素晴らしい街にされるものと信じています。

さて私は、学生時代を「早稲田大学グリークラブ」の一員としてすごし、現在もそのOBの集まりである「東京稲門グリークラブ」のメンバーで（現役時代とおなじようにトップテノールのソリストとして）歌っています。

きたる9月11日に、私の住んでいる羽村市の稲門会の主催で、「東日本大震災被災者支援チャリティー・コンサート」を、「羽村ゆとろぎ大ホール」で開催することになりました。プログラムは、黒人霊歌や新しいタイプの讃美歌、美空ひばりや山口百恵のうたを男声合唱にアレンジした曲、さらには宮城県民謡として良くて存じの「斎太郎節」など、皆さんに広く親しまれている曲の数々を3ステージの構成で歌います。

「ふるさと」や「母さんの歌」を会場の皆さんと一緒にうたおうということも企画しています。私は、「ふるさと気仙沼」に想いをはせながら力の限り歌おうと、他の団員とともに練習にはげんでいます。このコンサートの収益は全額義捐金として寄付されますので、気仙沼にゆかりのある皆さんにも是非ご来場いただいてコンサートを盛り上げていただきたいと願っています。

夫と見詰めた気仙沼の海

横田 悦子 (旧姓川村)

私の郷里は気仙沼である。3月11日の大地震で未曾有の災害に遭い世界中を震撼させた。郷里の親族、友人等の音信の無い状況を憂う日が続く。心配が募り募っての現在である。

気仙沼周辺は本来、風光明媚な漁港で海の恩恵に浴し生計を成し、潤っていたのに、今回は脅威となった。私は20歳までこの地で過ごし、仕事、結婚等でこの地を離れた。しかし時折、望郷の念で思うのは、この海辺の住みよい日々の記憶である。

特に20年前、家族で帰省し、夏の真っ青な海と緑迫る景観、波動が間近に見聞できる海辺に臨んだときの旅行が忘れられない。目前の海に心騒ぎ、子ども等はそれぞれ動き回る。海に入る末娘、リアス式の巨岩に登り、岩肌の打ち裂く波動に立ち望む息子たち。水平線がうっすらある濃淡の紺碧の広大な海に抗(むか)う若者の無言の姿。子ども等の行動を夫と共に見詰めたときから、途方も無く久しく覚える。

何せ、気仙沼のリアス式海岸や三陸沿岸を襲った地震、津波そして火災の猛威は大変な様

相ながら、故郷に住する親類が隣人に手を引かれ、何とか逃れた電話に安堵し、家中励まし合って喜んだ。「希望は捨てるものではない」と知りつつ、医療品、衣類等を送付したが、入手には半月ほど要したそうだ。学友の数人とも連絡が未だに取れない。とにかく無事を願い生活環境が整うことを祈っている。

しかし私が付き合った気仙沼の人はパワーがある。また困難なときほど助け合う姿勢を持っている。私ごとで恐縮だが、かつて実家は町の大口貸付の保証人として痛手を被ったことがあった。しかし、有為転変精神で、分家の医者の叔父は後年仙台で開業し、私は瀬谷の住民として消光できた。

発奮する潜在気質を持ち、前進する人たちを知っていればこそ復興する郷里の被災地、気仙沼であることを信じている。

※この寄稿文は横浜市瀬谷区老人会「区老連せや」7月号連載から転載いたしました。

真夏日の回収作業に感謝こめ
百合の一枝を芥に添ゆる

就労支援で気仙沼を応援しています

千葉 弘喜

気仙沼の皆さんが、悪夢のような現実に押しつぶされぬよう、働く場所の確保に奔走しています。小規模ではありますが、被災された方を当社で迎え入れ、広島県内で自動車製造関連の業務に就いていただいています。ふるさとを離れ、寂しい思いをせぬようケアにつとめ、いつかは

気仙沼でふたたび仕事ができるように支援していきたいと考えています。まだまだ復旧ままならぬ状況と察していますが、どうぞあきらめず、生き抜いてください。できることは何でもするつもりでこちらも頑張ります。

気仙沼の団塊の世代の皆さん、 復興のためにもう一度力を！

畠山 朔男

この度の東日本大震災で亡くなられた気仙沼の方々のご冥福をお祈りすると共に被災された皆様へ心よりお見舞い申し上げます。

あの日以来、既に100日が経過したがTVで毎日のように流されてくる気仙沼の映像からは未だに津波で打ち上げられた大型漁船や瓦礫の撤去がそれ程進んでいない様に思われる。

五月に入り気温の上昇と共に異臭が全市を覆い、耐え難い避難所生活を余儀無くされている方々は未だに10,000人以上との事である。国・県・市の行政もそれぞれ一生懸命に復興に向けて頑張っているのですが国民の目からは遅々として進んで居ない様に思えてならない。ましてや今尚避難所にて生活されている、家族を亡くし、家産を全て流された被災者の皆さん方はいつになったら元のような日常生活に戻るのだろうか、“日暮れて道遠し”の思いで一杯であろうと推察いたします。このような思いをされている方々に向かって“もっと頑張れ”と言えるだろうかとは実は応援メッセージを書くに当たって迷いに迷っているところである。

1,000年に一度と云われる大地震・大津波が起こった事は事実として受け止めなければならない。災い転じて福と成す様な復興を是非10年位の期間で成し遂げて頂きたいと願うばかりである。あの第二次世界大戦で焦土と化した日本が終戦後10年を経過した頃には“もはや戦後ではない”というキャッチフレーズが飛び交ったことは記憶に新しい。

戦後の復興の主力を担った方々は各地の戦場で戦い生き延びて帰還した人達と戦場には行か

なかったが中・高の在学中に工場要員として動員された若者であった。その後続く団塊の世代といわれ、戦後のベビーブームの時期に生まれた少年達がその後の日本の経済成長を支えた事は申すまでも無い。

しかしあの時と事情が大きく異なる事は、東北地方は特に少子高齢化の問題を抱えて居り大震災からの復興を目指す環境は大変に厳しいと言わざるを得ない。

如何に復興計画が素晴らしいものであってもそれを実行する地元の方々の強い気持ち無しにはその達成は難しいと言わざるを得ません。行政に頼らなければならない事は山ほどあるが一日でも速い復興実現のためには若い力の結集とそれをサポートする既に仕事の第一線を退かれた経験豊かな団塊の世代の力も絶対に必要である。

“もう引退した身だから・・・”などと言って居らないで是非復興のために一肌も二肌も脱いで皆さんの力を復興の担い手の主役である若者達に貸してあげて下さい。あなたの力が今必要です。幸か不幸か今回の大震災で気仙沼もナショナルブランド入りしました。全日本から復興の行程に注目が集まっています。現在、私は在京の気仙沼出身者の若い人達で立ち上げた支援の輪“リアス気仙沼”の後方支援に注力して居りますが、気仙沼に縁も無い多くの方々から気仙沼市に支援金や義援金の募金にご協力を頂いて居ります。本当に有難いことです。これ等の方々への期待に応える為にも気仙沼の皆さんには敢て言わせてください。“今しばらく困難に耐えて頑張ってください。

けっぱれ気仙沼

椿 信策

船着き場から大島への汽船が出る
 ポン、ポン、ポン、ポ、ポ、ポ・・・
 焼玉エンジンの心地よい振動が尻から頭に響く
 古ぼけた木の柱の魚市場
 魚が山盛りになったバンジョーが並ぶ
 オート三輪がバウンドしてサンマが落ちる
 暮れには近郷から正月飾りが道路わきで売られる
 「やんどやはい お正月は・・・」
 「なまこどり おどり・・・」
 懐かしく気持ちが震える
 子供の頃の風景がよみがえる
 東日本大震災によって失われた気仙沼の風景は
 心と頭の中だけの思い出になってしまったのか
 気仙沼という家の庭はガレキと化し
 あの清らかな鼎が浦には焼けた船が留まり
 いたるところに津波のつめ跡が残る
 自然の力に人と物は踏みにじられた
 尊い人と積み重ねてきた財産を失った

町は無残な姿をさらけだしている
 しかし ガレキの中の白い道の先に
 海を見つめる人の姿を見出す
 船を動かそうとする人
 倒壊した建物から復興の糧を探す人
 自然の力に形あるものは失われたが
 人の心は落ち込んでいない
 あの港祭りの老若男女の心意気
 市場のかけ声
 大漁旗を掲げた出港船の汽笛
 高校の運動会の前夜祭の雄たけび
 グランドでの球音
 かならず甦る
 気仙沼人はへこたれない
 気概と情熱をもって立ち上がる
 なんのこれしき
 けっぱれ

できることは何でもやる

佐藤 寿浩

震災後、気仙沼入りしたのは2週間後でした。テレビでみた通りの景色が目に入り、現実の世界なんだと痛感せざるを得ませんでした。自分ができることは何でもやろう、そのように決意しました。

初めの頃はワゴン車に物資を積んで知り合いに届けたものの、帰りにガソリンが買えなくて福島で一晩足止めを食らうことができました。以降ガソリンが手に入るようになってからは、女優の島田陽子さんやダンカンさんご夫妻を気仙沼へ案内し、避難所への慰問をアレンジさせて

いただいたり、私が勤務する醸造メーカーでうどんの炊き出しをさせていただきました。3ヵ月で7回ほど、実家へ立ち寄ったのはものの数分で、そのような振る舞いにも家族は暖かく迎えてくれました。

今回の震災で、自分の無力さと人のあたたかさ、そして気仙沼の方々のたくましさを感じました。気仙沼に住む友人は「ピンチではなく今までの人生で最大のチャンス」と語ることが強く心に残っています。

負けねえぞ、気仙沼!

東京において

鈴木 眞次

このような悲惨な災害をもたらした天の配剤を憎む毎日ですが、郷里の行く末が案じられてなりません。しかしながら、苦難の中、市民みんなで知恵を出し合って今後の生活の長い安定を模索し、実行しなければなりません。

1755年、万節祭ミサの最中にポルトガルでは想定外の「リスボン大地震/大津波」が起き、5万人の死傷者をだし、繁栄した国が衰退し、その後の復興に長い年月がかかりましたが、この自然災害の歴史を十分に学ぶべきだと思います。

言うまでもありませんが、気仙沼は漁業への依存を逐次低めるべきだと思います。まずは、将来、再度襲来する津波に備え、住宅地の選定を優先する必要があります。他県であります、沿岸地帯から遠く他県である室根山山麓の開発などを

検討したら如何かとおもいます。旧市内との連結は、高速のシャトルバスを高い頻度で運行させるのです。

港湾地帯は水産関係の施設を残しますが、広いスペースには、菜の花など、数十万の季節の花を栽培し、花の港町の景観を演出します。観光客のみならず、長い航海から入港する漁船員の心を癒すことでしょう。湾には、中距離及び三陸を就航する高速船で観光の復興を図ります。気仙沼湾は、向洋高校を拡充し、潜在性の高いメタンハイドレード等の石油代替品の海底探索や、ハイテック産業に必須で中国への依存性の高いレアアースの海底探索の基地として活用は如何でしょうか。いずれにせよ夢の実現に邁進すべきだと思います。

気仙沼へのメッセージ

鎌田 美恵

大震災から四か月を迎え、今朝のニュースではカツオの水揚げで活気を取り戻した気仙沼魚市場の様子が放送されていました。「解決しなければならない問題も多い」というコメントがありましたが、気仙沼の漁業復興の一步として素直に喜び、明るい未来につなげてほしいと思います。

先月帰省した際、市内八日町・南町を歩きました。四月末には道路の両側に山高く積まれていたがれきや多くの倒壊した家屋が、ほぼきれいに撤去されていて、作業の早さに驚きました。しかし、市内にはまだ手付かずの所もあると聞いています。一日も早い撤去を願っております。

被災者の方々の話を聞く時、私は被災された外国人の方々はどうしているだろうかと考えます。それは、1月23日に行われた「気仙沼市小さな国際大使館」設立10周年記念イベントで、気仙沼には約500人もの外国人が暮らしていると聞いたからです。日本語がよくわからないために、十分な支援が得られず困っている人はいないでしょうか。外国人が安心して安全に暮らせる、外国人にも優しい体制作りを今後の復興計画に期待したいと思います。

東北地方も梅雨が明け、いよいよ夏本番を迎えます。厳しい暑さが続く中、気仙沼の皆さまのご健康を心よりお祈り申し上げます。

(かまた・よしえ)

気仙沼復興への願い

佐藤 則好

悪夢のような大震災から20日後、ふるさと気仙沼へ車で行って来ました。テレビ画像で見ているにもかかわらず、現地の状況の惨さに心身共に凍りついた思いでした。小生が生まれ育てて頂いたあの町、その町の半分?位が無くなり、がれきの山に変わっていました。通行可能な範囲を見て歩きましたが、津波への憤りと町が消失した寂しさに言葉も出ませんでした。カメラを持参し、写真を撮って帰ろうと思いましたが、気が付いた時には一度もシャッターを押すこともなく、帰路の途中でした。多分、驚きで気が動転していたんだと思いました。本当にショッキングな一回目の帰省でした。

それから三か月、新幹線で日帰り帰省をして参りました。カツオの水揚げなども始まり、瓦礫の処理や復旧も期待して行っただんですが、私の想像以上に進んでませんでした。瓦礫処理が終わらないと復旧すら始まらないと思います。瓦礫の処理場の確保等、いろいろ問題点もあると思いますが、市長さん始め、市職員、議会の皆さんが市民を巻き込んで一丸になって、休日返上で瓦礫処理のスピードを早めて頂くよう最大の努力をお願いしたいと思います。

復興については小生の浅はかな持論を申した

と思います。

①復興に関わる費用負担は上限なしで8割国負担、1割県負担、1割が自治体負担にする。

②復興のキーは100年、1000年を見越した、減災と活性化する街創りをする。

③復興計画案は、県と第三者の専門チームに任せる。

④市の役目は、市民の意見集約（特に被災地の方々）して県に要望する。

この場合、各種業界団体のエゴな意見は聞かないようにすること。

特に市長のリーダーシップに期待する。

⑤減災は安全な避難場所を市内各所に造ること（10分以内で逃げれる所）と

⑥海岸線の建物は国からの助成を得て共同ビル化し、5階建ての鉄筋コンクリート造にし、屋上を避難場所にする。街の防波堤はあまり高くせず、強固な構造にする。

⑦活性化のため、市が各所に安い時間制駐車場を整備する。

⑧東北でも有数の物価高を改め、高価でない目玉商品を開発して観光客の誘致に努める。

まだまだ稚拙な私見がありますが、小さなことなので以上が小生の復興への願いです。

御支援して下さった皆様へ

朝田 長兵衛

2011年3月11日に発生した東日本大震災から早くも3ヵ月と少しが経過しました。

皆様の暖かいご支援に支えられ気仙沼工場の再建に向け一生懸命頑張っておりますが色々難しい問題が山積し厳しい状況の中にあります。

3ヵ月以上経過した現在でも気仙沼工場のある鹿折地区は大地震、大津波、大火災、地盤沈下の影響下にあります。陸にあがった数隻の大型漁船が道路を寸断し、復旧作業の大きな妨げと成っておりますし、地盤沈下などの影響により、重油やヘドロで真っ黒に成った異臭を放つ汚染水が干満時に30センチから1メートル前後滞留し、沼の様になっているのが現在の状態です。会社に重機や車が近づく事が出来ず、瓦礫の中に見える大型耐火金庫の搬出すら出来ない状況でもあります。そんな訳で、この地区の復旧が気仙沼で一番遅れております。未だに工場近辺にうず高く積まれた瓦礫の中や当社工場内の遺体搜索も十分には行われていない状況も有り困惑し心配もしております！

また工場のある現在地は2年間の建築規制地区に指定されている事もあり、この場所での再建は不可能と成り、現在地での再建は断念することに成りました。そんな事も有り水産加工の工場建設に向く適地を市内の内陸部に探しておりますが、まとまった区画の土地が見つからず更に地価が上昇傾向にあり困っているのが現状であります。

一日も早く工場を再開すべく努力し頑張っておりますので、もう暫く時間を頂きたく思います。

気仙沼の被災した市の中核部地区は今も污水やうず高く積まれた瓦礫の中ですが、その他の地域はライフラインもほぼ回復しつつあり、平常に近い生活が行われております。

スーパーなどには沢山の商品が売られておりますが、悲しい事に地元の水産加工品はほとんど販売されておられません。水産加工品では全国的に有名で沢山の商品群を誇っていたことが信じられない様な現実を見るにつけ一日も早く復活し気仙沼の味を皆さんにお届けしたいという思いを強くしているところです！

皆さんからお預かりした暖かいご支援を何らかの形で多くの被災した皆様の元にお届けしたいとの強い思いもあって、今回(株)波座物産函館工場にて気仙沼の味の一つである「気仙沼熟成塩辛」を再現復活させました。「気仙沼の味を忘れて欲しくない!」との思いもあり被災された皆様が生活している仮設住宅や避難所のある所で無償提供する企画を考え、地元三陸新聞社などの協力のもと6月11日(土)に実施されました。また同時に当社の「生造り塩辛」を使った「イカ塩焼きそば」も提供されました!同封の資料はその時の企画内容が分かる資料ですのでご覧頂きたく思います。

気仙沼の復興に役に立ちたい想いと雇用の創出が出来ればとの想いもあり波座物産は再建を目指して一生懸命努力し頑張っております。

元気に気仙沼工場の再建を目指し頑張りますので今後とも宜しくお願い致します。

ふるさとへの恩返し

武山 健自

これが夢であってほしいと何度思ったことか。市営駐車場の2階に栈橋がバンバンぶつかる中継を見て、この世の終わりだと思いました。もちろん家族とは音信不通。離れて暮らして、助けに行けない自分を責めたり、つながらない電話に気を揉んだりしました。悔しくて、悲しくて、けれどどうすることもできなくて、自衛隊やレスキュー隊員の救助の中継に何度も涙しました。

でも悔し涙はやめました。めそめそしてられないからです。僕ができることはちっぽけなこと、できないことはできない、逆に言えばできることをやりながら一緒に立て直していきたくて強く思っています。震災直後は手も足もでませんでした。色々とお手伝いできることが増えてきました。僕が得意とするのは看板やチラシを

つくることです。再開した友人のお店の看板などをボランティアで作ったり、ロゴマークをつくったり、デザインの面でいまお手伝いさせてもらっています。

復興には息の長い伴走が必要だと思っています。僕も息切れせず、できることで応援し続けていく覚悟です。一生懸命働いて、育ててくれたふるさと気仙沼に恩返しさせてください。

ありがたいことに、気仙沼市震災復興市民委員会のメンバーに推挙いただきました。気仙沼高校の関東同窓会や当会の事務局をつとめていることから、「出身者の意見をまとめてこい」との理由からの起用であると自負しています。出身者や縁のある方たちの想いを、復興につなげるべく精進してまいります。

地域活性化研究会 気仙沼ビューローについて

当団体は気仙沼地方と縁を持つ者たちが、それぞれが得意とする分野からの提言や活動を行い、気仙沼地方の発展に寄与できることを目指し、平成20年11月に設立されました。今後、テーマを絞った提案や勉強会を行う予定ですが、まだ設立されたばかりで夢は膨らむばかりです。気仙沼地方が未永く発展できるよう、外部からサポートできる最大限の事業をすすめていきたい、そんな風に考えております。

なお、参加資格はありません。気仙沼へ思い入れを持つ方であればどなたでも参加になれますので、皆様のご参加を心よりお待ち申し上げます。

【参加メンバー】(2011年2月25日現在 ☆印：新メンバー)

☆花柳寿々菊	☆藤村和男	☆小松憲代	☆東 勲
吉田利輝男	千葉一宏	佐藤則好	高濱 悟
小山智善	佐々木栄作	近藤 章	小山利英子
小野寺徹也	尾形 将	大森 郁夫	川村 浩
畠山信彦	貝塚文一郎	村上 洽視	畠山 明
中村勝子	日出 英輔	坂井 素美	岩手裕美子
佐藤晴男	畠山 朔男	菅原 洋道	佐藤 恭子
			武山 健自